

でも、同じデザインとは言っても、皆さんが持っている携帯とか、車とか、家はインフラに近いと思いますけど、そういうデザインとは根本的に違うところがあるということをよく考えないといけない。

皆さんも携帯電話を持っていると思いますけど、寿命はどのくらいですか。2～3年ですか、1年ですか。車はどのくらいですか。

こういうことを皆さん考えたことがありますか。ユーザーではなくて、自動車会社にとって一番望ましいデザイナーはどのような人か。もちろん売れないと困るから、カッコいいデザインをして、ショールームを見に行ったり、カタログを見てあぁいいなと思って買いたくなるデザインですね。これが第一でしょう。それはわかります。しかし、もっと重要なことがあって、どういうことかという、その車を買って2～3年乗っているとだんだんあきてくる。いや、なんかやばたくて、そろそろ新しい車に買い換えないとまずいんじゃないかなというふうに思わせるデザインがいいわけです。そうじゃないと1回買ってその車を20年も使われたら、自動車会社は儲からないですよ。だから、そんなことは言わないけど、自動車会社は絶対そうやっているに違いない。いいデザイナーというのは、ぱっと見た目で買って、しばらくして嫌になってくるデザインがいいんだと思います。

だけど、そういう車のデザインをしている人は優秀かもしれないけど、車だって選択権ありますからね。そういう人に選択権がなくて、何十年も使うデザイン、使わなければいけないデザインを任せるとするのは非常に危ない。だから、人間に選択権があるデザインかないかというので大きく分かれる。それから、寿命が長いかわいにかによっても大きく分かれる。この2つは、風景づくりにとって非常に重要です。本言うと、橋でも2～3年たって流行遅れになったら架け替えたいですよ。カッコいいほうがおもしろいから。でも、一回橋を架けると何十億円でしょう。そういうわけにはいかない。という話でスライドに戻ります。(スライド)

さっきコンクリートの劣化の話を書きましたけど、50年ぐらい持つでしょう。それから、こういうすごくシンプルな形ですから、見ていて飽きないと思います。そういうつもりでやりました。



橋のデザイン

・辰巳新橋

これからもうちょっと踏み込んで、具体的に橋のデザインってどう考えているかというのを、辰巳新橋というのを例にとってお話しします。(スライド)

ちょっと遠くで申しわけないんですけど、この黄色く塗ってあるのが東京の一番東の区で江戸川区という区です。この右側に千葉県と書いてありますが、ここが浦安でディズニーランドはこのへんです。江戸川区というのはこういう区なのですが、西側に荒川が流れていて、東側に江戸川が流れていて、戦後になってこの新中川という川という運河みたいなものがありました。これは地盤が低いので排水用に掘ったのです。ちょうど区を分断するように掘ったものから、橋をいっぱい11橋架けました。これが老朽化してきたので、全部架け替えようという話になりまして、区ですから大してお金はなかった。ただ、区長の中里さんという人が非常に熱心な人で、ここの市長さんもさっき初めてお会いしましたが熱心な感じがしますけど。やっぱりやるんだったらいい橋を架けようということで、仕事で呼ばれました。

上から上一色中橋、瑞江大橋まで全部架け替える計画をつくりました。(スライド)

11橋全部立派な橋にするのは予算がそこまでいかないので、3橋ぐらいいい橋を架けましょうというので議論していたときの図です。

最初の半年は何だかんだ議論して、下流から明和橋、それからこれ斜張橋で大杉橋、上はアーチ橋ですけど辰巳新橋って、こういう橋を架けましょうという議論をして、順次架けていきました。きょうはこの辰巳新橋のお話をします。(スライド)

話が専門的になるので、ちょっとわかりにくいところがあるかもしれませんが、しかし、専門の方もいらっしゃると思うので。

どういう橋にしようかと思ったんです。これ今回の浦添も海岸沿いの道路の橋をどういう橋にするかとか、モノレールの駅をどういう駅にするかというふうに議論するのは非常に大切だと思いますので参考にために申し上げますが、これはこの橋をやるときにはどう考えたかという、周りが割と開けているんですよ。だから、いろいろなところから見える。そういう条件でどういう橋にしようかと考えたときに、ぱっと見てわかるようになるべくシンプルで簡単な形にしたい。

2番目は、だけど見る方向によって表情が違う橋にしたい。わかりますかね。簡単な形なんだけど、見る方向によって形が違って見えるという橋にしたい。橋というのは一般論で言いますとずっと横長なので、真横から見たときは割とカッコよく見えるんです。しかし、ちょっと斜めから見たときにはなかなかいい形には見えない。そういう欠点をカバーするような、見る場所によって表情が違う橋にしようということを考えました。(スライド)

これ何やっているかという、橋は大して大きな橋ではなく

て120mです。専門的な言葉でいうと、これアーチリブというんですけど、鉄の骨です。鉄の骨を2本渡して上でつながる。TYPE 6、TYPE 7、TYPE 8、TYPE 9と書いてありますが、この鉄のリブ(骨)を渡すんですけど、それをどうやって結んだらシンプルに見えるか。後で出てきますけど、ここの橋を渡る人にとっては天井になるわけです。これだと6本になります。これは4で結ぶ。どういう形だったらシンプルかというので検討している途中のスケッチです。(スライド)

僕は橋の専門家ではなくて景観の専門家ですけど、一緒にやっていたのは三木先生という橋の専門家と一緒にやっていたので、三木先生は熊本のほうで歩道橋の吊り橋をいっぱいやっていたものから、さっきのは鉄なんですけど、こういうところは鉄ですけど、ここはケーブルですね。そういう鉄を使わないでワイヤーで結んだらもっときれいになるんじゃないのかな、「こんな橋どう？」って議論しているところです。(スライド)

最終的にはこれにしました。案11です。1カ所でしか結ばない。それが一番シンプルだから。このときに思ったんですけど、この橋は僕が橋のデザインを始めてから4橋目でした。そのときつくづく思ったのは、専門家は危ないなと思いました。専門家って、この場合でいうと橋の専門家ですね。橋の専門家はこういう鉄のアーチリブがあったときには何カ所でもつながるものだというのは常識化していて、こういう案が出てこない。構造の検討をしている人に計算してもらったら、これでもう十分ですということになったので、これが一番簡単な形だからこれでやりましょう。(スライド)

これは、説明しますが、この鉄の骨格の太さをどうするかと検討しているところです。一番細ければこれでいいんですけど、ちょっと細すぎて頼りないでしょう。(スライド)

これはちょっと難しいんですけど、簡単にいいますと、これわかりますよね。この橋を渡る方向から見ているところね。そうすると、このアーチリブ(鉄の骨)がちょっと内側に傾いているんです。これバスケットハンドルのタイプというんですけど、そういう橋なんです。そのほうが構造的に合理的だから。そうすると、このアーチの骨は断面でいうと四角形しているんです。柱だって四角でしょう。それを傾けているので、柱の下の方が両方とも地面に平行にならない。橋を渡っていく人間にとって、右側のものは左に傾いているので、そのアーチの骨の下の方が外側を向いている。左側のものも外側を向いている。だから、どういうことかという、自分を包み込んでくれるような形になっていないんです。それが前から嫌だなと思っていたので、傾けても下の面が地面に平行になるように、そういう不等辺四角形、菱形みたいなんですけど、それにしてくれと言ったら、宮地鐵工所という会社だったんですけど、実際に困った顔をして、そういうのは図面で書けないよねと言ったんですけど、熱心なエンジニアがいて、図面はきれいに書けないかもしれないけど、実際にすることはできるかもしれないと言って、結局つくってくれたんですよ。そ

れで非常にきれいな橋になりました。(スライド)

これは説明すると長くなるんですけど、建築でも橋でもそうなんですけど、鉄の部材とか、コンクリートの部材を組み立ててつくっていくでしょう。ここもそうですね。柱を立てて天井を張って、壁をつけてでしょう。このときは三木先生と相談して、そうじゃなくて、これ木のお盆のつもりなんですけど、そういう部材を組み立ててつくっていくじゃなくて、木のお盆をどんだんだんだナイフで削っていった、残ったのを橋にしたい。わかりますか。部材を組み立ててつくるんじゃないで、彫刻をつくるみたいに石を削っていった、残ったのが何とかなの像になるみたいに、そういう橋にしたらどうかという話をしていたときのスケッチです。(スライド)

これは模型です。建築のほうではつくるとしていますが、僕は土木ですが、川の仕事でも、橋の仕事でも、広場の仕事でも全部模型をつくります。模型をつくるというのは風景づくりにおいて大切な第一です。どういう時期につくるかというのも大事で、普通は、きょうも見せていただきました。浦添市役所の模型というのが9階に置いてありますが、あれはできた後に見せる完成模型ですよ。そうではなくて、デザインを検討しているときにどういうのがいいのかというのでつくるのがこういうスタディ模型というんですけど、これが重要なんです。

何でかという、僕もいろいろ経験しましたが、図面を書いて市民に見せてもよくわからない。今度はこういうものができるよ、これは平面図ですよ。これは立面図ですよと見せたってわからないですよ。だから、できれば模型をつくって見せる。しかし、これででき上がりですよという模型ではなくて、こういう考え方でいくとA案になります。こういう考え方でいくとB案になります。こういう考え方でいくとC案になりますというのをデザインを決める前に模型でつくって見せる。

これも最後に言おうと思っていることですけど、そういうふうにしなないと、今度つくる橋もそうだと思いますが、市民は自分が参加してつくっていった橋だというふうには思えないですよ。だって、今までの公共事業って大体やり方でしょう。専門家だけで議論していて、何かそのうち工事現場に看板が立って、今度こういう橋ができます。何かスケッチとかパーツが書いてあって、2、3年すると橋ができる。僕らの意見はどこで反映したんだろうという、そういう感じですよ。だから、橋に対して市民の方が愛着をもてないのは当然です。

だから、ここでお見せしましたが、議論の過程で必ず模型をつくって、しかしこれで終わりだという模型じゃなくて、皆さんの意見を取り入れて、変えることができますよという模型をつくって議論することが非常に重要で、この場合もそうです。(スライド)

これはモデル스코ープという胃カメラみたいなやつで、実際に橋を渡っていくときにどんなふうに見えるかなというの

を写真で写したやつです。(スライド)

これはもうちょっと細かいところで、これさっきのアーチリブなんですけど、これでつないでいるところ。こういうところがシャープに、角が出ていたほうがいいのか、丸くなったほうがいいのか、どっちがいいでしょうねというのも、紙に図面で書くだけでなくて模型をつくってもらって、実際にみんな見ることができる。(スライド)

これは色の検討です。こんな橋になるんですけど、どうですか、この色合っていると思いますか。合っていないですね。(スライド)

これはどうですか。これはシルバー色なんですけど。これは僕の4橋目の橋ですから、このときはこのぐらいしかしませんでしたけど、今はどうやっているかという、色が決めるのは重要だっていうのを、しばらくして気がついたんです。何で気がついたかという、例えば、僕が橋のデザインをするときですね。そうすると、色なんかたいしたことはない、全体の形がきれいにできればいいんだと、こう思っていたんです。ところが、市民の人に、今度この橋を架け替えます、この橋は何という橋ですかという、何とか何とか橋なんて言わないんです、市民の人は。これは赤橋ですねという。色で言う。つまり、市民の人は形よりもむしろ色のほうに興味を持つんです。そのとき、ああーっと思って、ああそうだ、僕は専門家だから、いかにきれいな形、いい形にしようかって考えるんだけど、むしろ使う人は色なんかに親近感を抱いているということがわかったので、それ持ってくればよかったですね。今はどうやって橋の色を決めているかという、コンクリートの橋は色塗りませんから関係ないですけど、どうやっているかという、普通はこういう紙のチップの色見本でいろいろ見て決めるんですけど、それだと間違うので、畳1畳分ぐらいの鉄板を用意してもらって、そこに候補になる色を5〜6色塗って、現場でクレーンで吊るしてもらって、みんなと一緒に見て決めます。(スライド)

これはどういうことをやっているかという、これさっきの橋です。ここが車道でここが歩道なんですけど、市民のほうから要望が出て、こういう張り出しをつくってくると、テラスとかバルコニーといいますけど、川とか風景を眺めるのにいいですよ、なるほどと思って、つくるとすると、こうなって、しかし、ちょっと張り出さないといけないから、こんなふうになって、下から見ると格好悪いからこんなふうに、化粧板といいますけど、板を張りますよね。それで、まあこうやったほうが、風景を眺める、川を眺める場所ができていいかと思ったんですけど。(スライド)

実際にモニタージュをしました。これは色ついていません。こういうふうに例えば5m張り出す。そうすると、この橋はどうみえると思いますか、皆さん。人間というのは、これは僕は景観のほうの専門なんですけど、角張ったところを注意して見るんです。直線とかなだらかな曲線というのはほとん

ど見ない。それは何でかという、物の形をぱっと認識したから。例えばこれだと(プレート掲示)皆さんの目はこことここここに止まって、こういうところは丁寧に見ないんです、こういうところは。わかりきっているから。ここにぱっと目がいって、ここに目がいって、ああ四角だとかうぱっとわかる。人間というのは、動物ですから、なるべく早い時間に物の形をパッと見抜く必要がある。それじゃないと敵に食われてしまうから。この橋の場合どうかという、ここが角張っていますよね。ここも角張っているでしょう。だから、この橋を最初に見ると、ここにパッと目がいって、すっときて、ここに止まって、すっとして、あ、すごい単純な形だとすぐわかるわけです。それが僕は狙いだった。ぱっと見てわかる橋。

ところが、ここにこういうふうに張り出すと、上から太陽が照ってくると影ができます、ここに。そうすると、さっき言ったように、ここで目が止まって、すっときて、またすっと止まって、ああすごい単純な橋だ、簡単な形だと思ったのが、ここでまた目が止まるわけです。そうすると、だんだん形が複雑になってくるわけです。わかりますね。

それで随分考えたんですけど、これはこの橋については、市民の要望は無視するということにしました。つまり、張り出しはつくらない。何でかという、そのときは直感的にそう思って、こういうのがいいんだと思ったんですけど、後になってよく考えて、最近はずっと理屈がつくようになったのでそれを申し上げますと、このときにこういう張り出しをつくってくれと言った市民は、私が相手にしている市民の何分の1かにすぎない。わかりますか。つまりこの橋は、架けたら少なくとも50年使う。今の市民は、例えばそれが50歳だとすると、あと30年しか見ない。今、子供で何も意見いわない人も、将来の市民である。今、生まれていない人も将来の市民。そういうふうに50年間という年月をとって、市民全体を考えると、今、いろいろ意見言っている市民は、そのうちの何分の1でしかないというふうに思っているわけです、今。だから、今の人がこうやれと言っても、いや、私の今までの経験から言って、50年、100年使う、そういう全体の市民を考えたら、あなたの意見とは違うと、こういうふうに言っている。

これも大事なことです。市民参加と言っているけど、今生きて50、60歳でワーワー言っている人、ワーワーと言ったら失礼ですけど、言っている人だけが市民じゃないんだから。むしろ何のために橋架けているかという、例えば浦添で架けるとすると、赤で架けましたけど。今、元気でやっている人のために架けているわけじゃなくて、その子供の世代のためにやっています。あるいはその孫の世代のためにやっているんだと、そういうつもりなんです。(スライド)

それで、ようやく橋ができまして、こういう形になるわけです。土手から見るとこんなふうなものすごい簡単な形です。(スライド)

もうちょっと橋に近づいていくと、だんだんこの形が割

れているので、こういう形。(スライド)

橋のたもとに行くところの形。(スライド)

橋の脇に行くと、ここは直角じゃないんですけど、こんな形になる。(スライド)

土手から下りて街中から見るとこんな形。同じような形だと思います。(スライド)

しばらくして、できた後、区役所の人だったんですけど、区役所の人にこの橋の評判はどうですかと、ちょっと気になるから、やっぱり。聞いたら、確かにほかのところにはないような橋ですね。それはそうです、あんまりないですから。だけど、ちょっと変な橋ですねと言っていました。そうかもしれない。(スライド)

あの橋はおもしろいことがありまして、一番最初にやったのは、さっき紹介した松戸の橋だったんですけど、公園の中につくった橋だったんですけど、最初だったからこんなにうまくデザインもできなくて、まあまあのできかなど。だから成績で言うと優・良・可とか、A・B・C・Dってあるでしょう。良かBぐらいかなと思ったんですけど、それは賞をもらったんです。さっき見せた橋が結構きれいにできたので、ああこれはまた賞をもらえるかなと思った、これは賞もらえなかった。おもしろいですね、だから賞なんてあてにならないです。見る人次第だから。(スライド)

ただ、おもしろくて、テレビドラマの舞台で2回で使われたんです。あるときテレビを見ていたら、あれどこで見た橋だなと思ったら、この橋が舞台になっていた。何かスマップのドラマだったかな。ぼくはスマップが好きで見てたんじゃないです。一緒に出ていた常盤貴子がちょっといいなと思ったから、見てたんです。

そんな舞台になったり、去年か、学生と行って、通りがかりのおばさんがいたんで話していたら、その女性は駅からタクシーで家に帰るとき、さっきの選択権の話じゃないですけど、こっちの橋渡ってもいいし、こっちの橋渡っても行けるという、どうでも行けるらしいんですけど、運転手さんには、きれいなほうの橋を渡ってくださいと言うらしいんです。やっぱりそういうことしてくれるとうれしいですよ。

高架橋のデザイン

・日暮里舎人線(スライド)

これは、ちょっと配水管が汚いんですけど、新交通のデザインもやったことがあるので、日暮里舎人線という、山手線の日暮里から出るモノレールの新交通のデザインです。西村君というのとやりました。これは鉄です。まだ工事中です。(スライド)

これは荒川のところを渡っている橋です。(スライド)

これがそうです、この橋です。これ、ものすごい長い。(スライド)

ピアという、向こうに見えますけど、この軌道を支える、これわかりますか、これ鉄の箱が2つあって、ここからこう張り出しているんです。だから、沖縄のモノレールは跨座式だ

から、こういうふうにはいかないと思いますけど、ものすごく張り出すようになって、真ん中に柱1本立っているだけなんです。そこまではきれいにできたんですけど、西村君という教え子と一緒にやったんですけど、これは東京都が金出してやったんですけど、これ駅のところなんです。見沼代親水公園と書いてありますが、これ弁当箱みたいでしょう。那覇のモノレールも弁当箱みたいですよ。これ本当はちくわみたいな形にしようと思ったんですけど、楕円形の。そういうのがきれいに見えるから。最初は、インフラ、桁と柱のところは結構予算があったんできれいにできたんですけど、最後の最後になってきたら、予算がなくなってしまって、どんどん切り詰められて、駅はこんな弁当箱みたいになった。だから、最初から言ってくればいいなと思ったんだけど、一番人が使う駅のところに本当は金かけるべきなんです。日常的に使うんだから。本当は逆だった。

だから、駅がちょっと狭くなった。これでおわかりだと思いますけど。(スライド)

これは駅前広場です。何かあまりいい駅前広場じゃないね。ということで、そろそろ時間ですけど、さっきちょっと言いかけてみましたが、税金使って、ユーザーが選択権のないものをつくるわけですから、押しつけのデザインになったらまずいんです。これがいいだろうとかという。だから、できれば議論の途中にも参加してもらって、その意見を全部取り入れるわけではありませんけど、ユーザー側から見てどうだという意見を取り入れながらデザインするという。それに対しては、デザインしている場所をオープンにする必要があるんだろうと思います。

最近のデザインは委員会で決めているんですけど、地元の代表のデザインする側と。傍聴自由で、周り全部市民が見ています。模型作って議論していますからわかります。終わった後に、要望言ってくる人もいます。だから、今までみたいに役所とコンサルタントと設計事務所で図面書いていろいろ議論して、もうこれでいいよねというんで、模型つくってこれでやりますよというのは、やっぱりまずいと思う。そういうプロセスが非常に重要です。ただ、面倒くさいですけど。いろんなこと言う人いるから。無茶苦茶なこと言う人もいるのでちょっと困ります、時々います。

大切なこと

・人(担当者、設計者、施工者)

・この橋は…、誰の橋

それから、何よりも大事なものは、例えばモノレールでも、駅でも、橋でもそうですけど、公共施設ですよ、公共施設だからみんなのものだというふうになるわけですけど、考えて見ると、みんなのものだけど、だれのものでもないかもしれない。つまり、だれも自分のものだと思ってないのかもしれない。それがまずいわけです。だから、橋を架けても、市長さん

はここをさっき広場といいましたが、あの橋は俺の橋だ、この広場は私の広場でもあるって、そういうふうになるようにならないとまずいと思うんです。そういうことをやるにはどうしたらいいか。それがこの20年ぐらいやってきて、非常に大切なことですかね。やっぱりこの公園は僕の公園だとか、この橋は僕の橋だというと愛着がもてるので、みんな維持管理とかにすごく協力的になるんです。

私がやっていた宮崎の日向というところでは、一部そういうことをやっていたら、私が直接やったんじゃないんですけど、私と一緒にやっていたデザイナーが何やったかという、橋の高欄ってわかりますよね、手すり。彼はそのデザインをやったんだけど、その手すりの取り付け、据え付けは住民と一緒にやった。もちろん工事会社の人に来ています。みんな素人ではできない。それで、ああこの手すりは俺たちが全部参加してつくったんだということなんで、毎年1回掃除しています。自分の橋だと思っているからです。

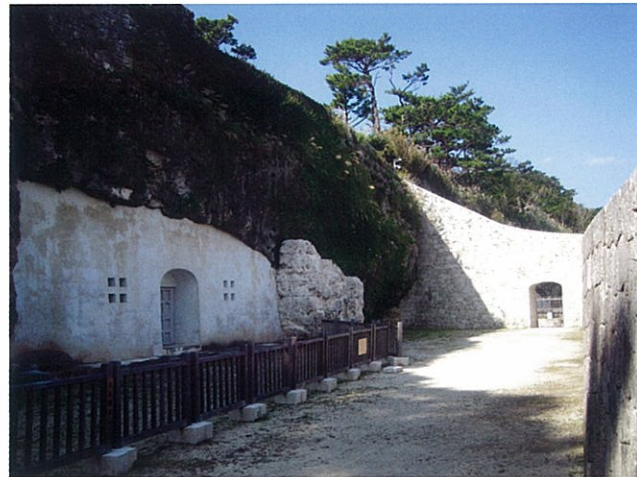
最後に嫌味を言いますけど、だけど景観というと、戦前からいろんなことをやって勉強したら、都市美運動というのがあって、何をやってたかという、まず日本の場合景観というと清掃なんです。2番目が広告・看板どうするか。3番目が緑化。戦前もそうなんです。今でもそうです、景観というと。

それだと、あまり自分のものだと思えない。ただ掃除して、掃除というのはゼロをマイナスにするだけだから。そうじゃなくて、自分も参加してつくったんだ、だから大切に使うってこうやって、そういうことを考えないといけない。それは、掃除とかそういうじゃなくて、小さな広場をつくる時もそうでしょう。そういう、自分のものだと思う公共施設をいかにつくるかというのが大事だと思います。

ちょうど時間ですか。どうも熱心に聴いていただきましてありがとうございます。

篠原 修氏 プロフィール

1945年 神奈川県生まれ
1968年 東京大学工学部卒業
1971年 同大学大学院工学系研究科修士課程修了
1980年 建設庁土木研究所
1991年 東京大学大学院工学系研究科教授
2006年 政策研究大学院大学教授、東京大学名誉教授



浦添ようどれ



当山の石畳



カーミージ

景観行政の取り組みについて …… 浦添市 都市建設部 美らまち推進課

◆ 浦添市の景観まちづくりのこれまでの取り組みと今後の展望 (要約)

【はじめに】

本市の人口は、戦前は約1万人強で推移し、前大戦で多くの市民が亡くなり戦後は約5千人からのスタートとなり、戦後は、基地や那覇市の影響を受けながら急激に人口が増加します。その後、平成12年を境に社会増がマイナスとなり、現在は自然増のみで年千人程度の伸びとなっています。都市計画は、昭和43年に国道58号線と国道330号線の間を定めたのを始めとして、現在は基地を除く市域の9割が市街化区域となっており、緑被率は、約90年前が約82%で平成10年には20%に減少しています。

【これまでの取り組み】

そのような都市化の中で都市環境の改善或いは地域資源を活かした景観まちづくりの取り組みが、昭和59年の景観賞から本格的に始まります。

景観まちづくりの取り組みは、「てだこ市民によるウラソイ風景づくり」を理念に「景観法を背景とした届け出制度の取り組み」と「市独自の地域と協働のまちづくりの取り組み」が挙げられます。

市独自の取り組みは、昭和50年代後半から「魅力的な街づくりへの実践」として「街に緑と花を」、「まちに水辺を」などの実践的な施策展開を行い、「彫刻のある街づくり」として主に公共施設を中心に彫刻や壁面のレリーフなどを取り入れています。また、「わかりやすい街」として住居表示板を中心に公共施設のサインなどの計画を立て順次取り組みを行なっています。昭和63年に、浦添市景観形成基本計画を策定し市の全体的な景観形成の基本計画を定めています。景観賞は、県内初の取り組みとして昭和59年に創設し平成12年までに第1回から第16回の開催をし、その後、15回の節目に景観賞の審査委員会から提言を受け、まちづくり活動助成制度である「まちづくりプラン賞」へと移行します。「まちづくりプラン賞」は、平成11年度の第1回から本年度までに延べ73件の活動に対して1,020万円の助成を行っています。また、関連して市道の植栽管理を行う「美らまちサポーター制度」など花と緑が中心の地域の活動に対する支援を緑化推進の部門がおこなっており、「まちづくりプラン賞」との相乗効果が出ていることが本市の特徴の一つとして挙げられます。

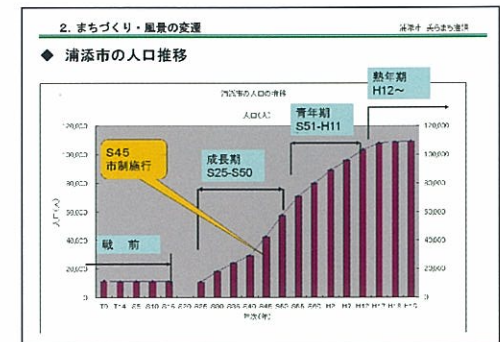
景観法に基づく取り組みは、平成18年に本市は景観行政団体となり、その年に本日のコーディネーターを務める池田先生を会長に、専門家、市民等からなる「景観まちづくり市民会議」を設置し約半年間で運営委員会を含めて計20回程度の会議を重ね、景観計画を策定し、平成19年7月に議会の同意を得て景観まちづくり条例と景観計画の告示・施行を行いました。

また、仲間地区においても重点地区指定に向けたまちづくりの活動を約10年近く行ってきた経緯があり、その結果、平成20年7月には「景観まちづくり仲間重点地区」の指定を行っています。

【今後の展開】

今後の展開として、海岸・港川地区と浦添グスク周辺地区の2地区についてお話しします。西海岸・港川地区は、浦添北道路や臨港道路整備が予定されており、この間、橋梁の構造、デザインや、高架橋に関して幾度となく景観審議会等で審議を行って頂きました。今後は港川のカーミージを中心とした自然海浜の保全と利活用について景観形成に取り組んでいきます。都市機能用地については、跡地利用の先導的な地区であり建築物等の街なみの誘導などに取り組んでいきたいと思っています。

浦添グスク周辺地区は、モノレールの延長や38号線の拡幅に伴って前田・茶山地区の周辺地区を景観地区指定或いは重点地区指定を行っていききたいと思います。最終的に浦添グスクの世界遺産の追加登録を視野に、そのバッファゾーンとしてのグスク周辺地区の歴史的景観の形成を推進します。



図：浦添市の人口推移



図：骨格別方針と景観資源



図：景観まちづくり市民会議の様子



図：浦添グスク周辺のまちづくりの展開